

「法華經の価値」の開示

ニルマラ・シャルマ

「創価」とは「価値創造」を意味します。この未来志向の概念は、牧口常三郎によって生み出されました。牧口は、「価値創造」が幸福な人生をもたらすと考えていたのです。1928年、牧口は法華經に基づく日蓮仏法に出会い、この經の中に彼の「価値哲学」を見出しました。そして「価値創造のための教育（創価教育）のシステム」を提唱したのです。

彼が法華經の価値への確信を深めるにつれて、自由を抑圧する当時の政府の軍国主義路線と激しく対立していきました。やがて軍部政府によって、牧口とその弟子・戸田城聖は投獄され、牧口は獄死しました。戸

田は、獄中で法華經について、ふたつの深き認識に達しました。すなわち「仏とは生命である」ことを洞察し、「私自身が地涌の菩薩である」と深く自覚したのです。

「価値論」と「生命哲学」との結合

こうして戸田は法華經の教えを弘める決意をしましたが、その恩師・牧口こそ、生命と価値を結びつけた初めての哲学者でした。

19世紀まで価値についての一般理論は存在せず、その発見は、19世紀最大の哲学的快挙とされ、「価値論」(独: Axiologie / 英: axiology) という哲学用語が作られ



美術史・仏教学を研究するシャルマ教授。著書に『クマール
ジーヴァ（鳩摩羅什）』などがある

ました。価値論は発展し、「現実存在と価値との関係とは」など、いくつもの考察がなされました。ドイツの神学者アルブレヒト・リツチュル（Albrecht Ritschl／1822～1889年）は、価値を中心に神学を論じました。「価値の判断」と「事実の判断」の区別、前者の後

者に対する優越という現代の考え方は、彼が論じたものです。

牧口は、形而上学や自然科学の議論から離れて、価値が生命の仕組みそのものに本来具わっているとした点で、異彩を

放っています。価値は、人間の心に存在し、人間の行動において機能する「リアル」なものであるとし、「〔善〕の価値などの」あるべき理想が、現実を左右する」という価値の力を明確にしました。

「創価」という言葉には、中国の表意文字文化が反映されています。中国語は表語文字（表意文字のうち、一字が一語を表す文字）である漢字を使用し、単語の文法変化がないため、中国の思想は具象性、現実主義、簡明さへと向かいました。中国文化の内実は、目と耳を通してなければ理解できません。こうして中国語の仏教用語は、人生と生活の具体的事実に根ざした表現となりました。抽象的なサンスクリット語が、具体的なイメージで表されているのです。複雑な概念も、具体的な比喩に変えられました。

例えば、「完全」は「円」となり、「本質」は「眼目」あるいは「眼睛」となり、「本性」は「本来の面目」となっています。以上の例は、中村元博士の『東洋人の思维方法』によっています。

中国の仏教は、地方でも広く信仰されました。僧た

ちが、医薬や飢饉救援の穀物、優れた水車、インド式の搾油機などをもたらして、耕作地を拡大し、また門前市の開催で遠方から商品を集めたり、新しい職業を生んだり、といった実益をもたらしたからです。

仏教は、人生を豊かにするものであり、門前市では官吏と農民が身分にかかわりなく交流しました。そのそばには、見事な伽藍が美しいたたずまいを見せていました。

唐の詩人・白樂天は、814年（元和9年）、ある僧院（西安市近郊の王順山にある悟真寺）を訪れて、こう詠じました。

前には対す多宝塔、風鐸（ふうたたく）四端（したん）に鳴る。

……

西には開く玉像殿、百仏森（ひゃくぶつしん）として肩（かた）を比（な）ぶ

……

逼（せま）りて観（み）れば鬼功（きこう）かと疑（う）ふ、其（そ）の跡（あと） 雕鏤（ちようろう）に非（あら）ず。

（亭の前には、多宝塔が向き合い、風鐸が四方の軒端に

鳴っている……西には玉像殿が開き、百体の仏像がおごそかに肩を並べておられ……近寄ってよく観れば、鬼神の技になるかと思われる。その御姿は、とても人の手で彫刻したものではない）

「悟真寺に遊ぶ詩一百三十韻」（白氏文集・卷六）から。岡村繁著『新釈漢文大系98 白氏文集 二上』明治書院。新字に改め、一部表記を改変した。

牧口常三郎は、經典の概念を具象的なものに置き換える中国の偉大な伝統に則って、「生命の尊嚴」を体系的に示す、斬新で鋭い法華経解釈への道を見事に開きました。従来の日蓮解釈を、現代のニーズに合ったものへと発展させたのです。

法華経を「ニュー・ヒューマニズム」の魂に

この牧口の思想は、池田SGI（創価学会インタナショナル）会長の非凡な資質と情熱によって、驚異的な活力を得て、世界中に広まりました。池田会長は、大海のように深い法華経の哲学を偉大な高みへと導き、平和

とソフト・パワーと慈悲の共生社会をたゆみなく追求してられました。それはひとえに、現代の制限なき食欲や先端技術の破壊的なまでの肥大のなかで、私たち人類が道を踏み外すことのないようにとの願いからです。

池田会長の代表作『法華経の智慧』は、サンスクリットの原典から天台の円融の教義へ、そして日蓮聖人による革新的な解釈へと、法華経を「新たな人間主義」の魂として展開しておられます。

天台宗の慧文（初祖。竜樹を祖とした場合は第二祖）は一心三觀を会得し、ここから一念三千という中心的な教義が発展しました。大聖人は、それを「一念の浄化によって（国土も含めた）生命全体を変革する」という、全世界を救済する教えに進化させました。池田会長は、法華経による内面の変革を「人間革命」と呼び、その究極の目的は平和な世界であり、人類の幸福の実現であるとしています。

池田会長にとって、生命の尊厳、人間の尊厳こそが法華経の実践の究極の目的であり、それは生命哲学の

実行にはかなりません。会長の倫理的な世界主義は、社会の道義的境界を高めようというものです。会長は、シャーンティデーヴァ（寂天／7～8世紀のインドの中観派の僧）が『入菩提行論』で述べている「一切衆生の幸福」のために、これまでも、そして今も、人生のすべてを捧げておられるのです。

私は『ニュー・ヒューマニズム（New Humanism）』と題された池田SGI会長の諸大学講演集（英語版。日本語の講演集は『21世紀文明と大乘仏教』を読んで、胸が躍りました。そこには、次のような智慧が語られています。

民衆…池田会長は、中国の明代の思想家・王陽明の英知を引いて、「文化の発展と社会の安定の基盤は『民衆』にこそ求められねばならぬ」と述べています（1990年5月の北京大学での講演「教育の道 文化の橋——私の一考察」）。

さらに、以下の詩で、感動的に民衆を讃嘆しています。

民衆よ――

君こそ 現実だ

……

君のいない科学は冷酷――

……

君のいない宗教は無慙――

〔青年の譜〕所収「民衆」

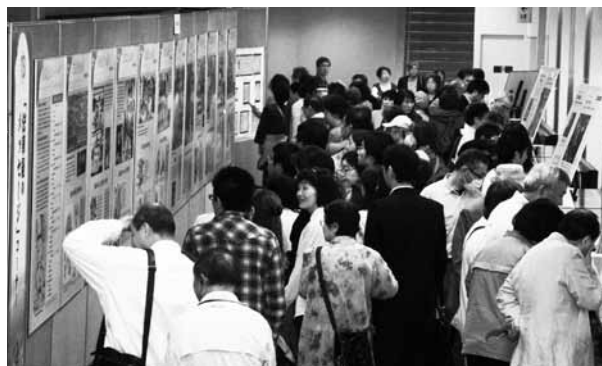
池田会長は、技術の進歩によつては、人間の心と知性を文化のネットワークで結ぶことはできなかったと振り返り、「地球を包む精神のシルクロード」で人と人の心をつなぐと、生涯をかけて邁進しておられます。その現実の結晶がSGIといえましょう。

池田会長は、日常性と超越性がともに花開く「宇宙的ヒューマニズム」によつて人類を豊かにしてくれました。「人間第一」を強調し、「微笑みの力」を説く会長の思想の砦に拠つてこそ、人類は互いに助け合いながら生きていくことが可能になるのです。

「われわれ」と調和…池田会長は、「われ」よりも「われわれ」を、分断よりも調和を、と「共生のエートス」を提唱しておられます。創立以来、SGIはこの「調和への意思」をメンバーの中に醸成してきましたが、それは、すべての事象はつながっているという「縁起」の思想に由来しています。SGIメンバーによつて、人と人とのつながりが差異や争いを凌駕する、新たな秩序が創出されようとしています。

自然…人間が自然を支配しようとするとは自然は荒廃し、大災害を引き起こします。近代化が、人間を自然や宇宙から遠ざけています。池田会長は仏教の「縁起」観に基づいて、自然を神聖なものとし、人間がこうした生命の全体性との一体化を取り戻すべきであると語っています。これは、法華経（葉草喻品）で説く、あらゆる所に新たな生命を芽吹かせる慈雨に通じます。これは万物の共生を象徴しているのです。

内在する宝塔…池田会長は、詩的な表現と深い叡智



連日、多くの市民が訪れた「法華経——平和と共生のメッセージ」展（東京展、2012年5月1日）

をもって、「人類の一人ひとりが内面の宝塔を輝かせ、大我に目覚めよ」という祈りへと、私たちをいざないます。

生命の永遠のリズム…「ガンジー主義と現代世界」と

いうテーマを語った際、会長は、永遠なる生命の律動（リズム）が、万人に、そして宇宙そのものに活力を与えていると述べています（1992年2月のガンジー記念館での講演「不戦世界を目

指して——ガンジー主義と現代」）。私たちはこの宇宙のリズムから外れることなく、きらびやかな物品への執着を超えて、生命を護り、他者を愛するために、仏界への道を歩まねばなりません。

ソフト・パワー…武力・政治権力・技術官僚支配といったハード・パワーは、宇宙的ヒューマニズムというソフト・パワーでコントロールしていかねばなりません。ソフト・パワーをテーマにしたハーバード大学での講演（1991年9月の「ソフト・パワーの時代と哲学」）は、内的に結ばれ合う未来へと、私たちの意識を一新してくれるものです。

私にとって、池田会長こそ現代の偉大なる見者（マハ・リシ）です。エマソンの言葉を借りれば、「あなたを通すことによって、一切がより崇高なものに生まれ変わる」のです。

（Nirmala Sharma／インド文化国際アカデミー教授）